

『釈禪波羅蜜次第法門』「修証」の註釈的研究（二）

大 松 久 規

はじめに

『釈禪波羅蜜次第法門』（以下、『次第禪門』）は、智顗（五三八―五九七）が陳の都である金陵（建康）の瓦官寺において講説したものを、弟子の大莊嚴寺法慎（生没年不詳）が筆録した典籍^①で、現行のものは全一〇巻から成り、智顗前期時代の講説をまとめた著述としては最も大部なものである。その内容は、主に龍樹の『大智度論』に散説された諸法門を組織づけたものであり、併せて、諸禪師の各種禪觀への言及も行われており、あらゆる実践法を禪波羅蜜によって統括することを意図して講説されたものであるため、智顗の前期時代の思想を研究する上での最も基礎的

『釈禪波羅蜜次第法門』「修証」の註釈的研究（二）（大松）

な文献として位置付けられている^③。本稿では、「修証」における初禪の証相に関する講説を採り上げる^④。

凡例

- 一、本稿は『次第禪門』巻五における第七「釈禪波羅蜜修証」章の一部（『大正藏』四六巻、五〇九頁、中段―五二頁、下段）の本文と訓読文、及びその註釈である。
- 一、上段に本文、下段に訓読文、論末に註釈を記した。
- 一、訓読に際しては『大正藏』第四六巻所収本を底本として用いた。
- 一、旧字体は原則として新字体に改めた。

『釈禪波羅蜜次第法門』「修証」の註釈的研究(二)(大松)

- 一、本文中の句点は、原則として『大正藏』に従ったが、明らかに不適當である場合は文意に即して訂正した。
- 一、本文及び訓読文中における改行等は筆者によるものである。
- 一、なお、今日の人権的観点からすると不適切と捉えられかねない表現が存在するが、それらは文献学上の立場から原文を尊重したことによるものである。

【本文】

第三明証禪相。通方便論証。自有三階。
一証欲界定相。二証未到定相。三正明証
初禪相。

一明証欲界定。自有二意。一正明証相。
二明得失。

今説欲界中自有三。一麁住心。二細住

【訓読文】

③ 証禪の相を明かす

第三に証禪の相を明かす。方便に通じて証を論ぜば、自ら三階有り。一に欲界定を証する相、二に未到定を証する相、三に正しく初禪の相を証することを明かす。

I 欲界定を証することを明かす

一に欲界定を証することを明かさば、自ら二意有り。一に正しく証相を明かす。二に得失を明かす。

i 正しく証相を明かす

今、欲界を説く中に自ら三有り。一に麁住心、二に細住心、三に欲界定を証

心。三証欲界定。

一 麤住相者。因前息道諸方便修習。心漸虛凝。不復緣慮。名為麤住。

細住相者。於後其心泯泯轉細。即是細住心。

当得此麤細住時。或將得時。必有持身法起。此法發時。身心自然正直。坐不疲倦。如物持身。若好持身。但微微扶助身力而已。若是麤持身者。堅急勁強。來則苦急堅強。去則寬緩困人。此非好法。

心既細已。於覺心自然明淨。与定相應。定法持心。任運不動。從淺入深。或經一坐。無分散意。所以說此。名欲界定。入此定時。欲界報身。相未盡故。

す。

一に麤住の相とは、前の息道もて諸の方便を修習するに因りて、心の漸く虚凝にして、復た縁慮せざるを、名づけて麤住と爲す。

細住の相とは、後において其の心、泯泯として轉た細ならば、即ち是れ細住の心なり。

当に此の麤細住を得る時、或いは將に得んとする時、必ず持身の法の起ること有り。此の法の発する時、身心は自然に正直にして、坐するも疲倦せず。物ありて持身するが如し。若しは好き持身ならば、但だ微微として身力を扶助するのみ。若しは是れ麤の持身ならば、堅く急に勁強にして、來たるとき則ち苦にして急に堅く強く、去るとき則ち寛く緩く人を困らす。此れは好き法に非ず。

心は既に細なるのみ。心の自然に明淨なるを覺するにおいて、定と相應す。定法の持心は、任運にして動ぜず、浅より深に入り、或いは一坐を経て、分散の意無し。所以に此れを説きて欲界定と名づく。此の定に入る時、欲界の報身、相の未だ尽きざるが故なり。⁶⁾

二明得失者。入欲界定。法心既淺。未有支持。難得易失。易失因緣。是事須識。失定有二種。

一從外緣失。謂得定時。不善用心。内外方便。中途違犯。則退失禪定。復次若行者當得定時。或向人說。或現定相令他知覺。或卒有事緣相壞。如是等種種外事。於中不覺不識。障法既生。則便失定。若能將護。本得不失。障不得生。故名為得。

二者約内論得失者。有六種法。能失禪定。一希望心。二疑心。三驚怖。四大喜。五重愛。六憂悔。未得禪有一。謂希望心。入禪有四。謂疑怖喜愛。出禪多有憂悔。此則能破定心令退失。若通論此六。皆得在未入住出中。俱有此六法。能

ii 二に得失を明かす

二に得失を明かすとは、欲界定に入りて、法心既に浅く、未だ支の持するごとと有らず、得難く失し易し。失し易き因緣、是の事須く識るべし。定を失するに二種有り。

一に外緣によりて失す。謂わく定を得る時、善く用心せず、内外の方便、中途に違犯すれば、則ち禪定を退失す。復た次に、若し行者、當に定を得べき時、或いは人に向かいて説き、或いは定相を現じ他をして知覚せしめ、或いは卒かに事緣有りて相壞し、是の如き等の種種の外事あらば、中において覺せず識せず、障法既に生ずれば則便ち定を失す。若し能く將護して本より得て失せずんば、障の生ずることを得ず。故に名づけて得と為す。

二には内に約して得失を論ずとは、六種の法有りて、能く禪定を失す。一に希望心、二に疑心、三に驚怖、四に大喜、五に重愛、六に憂悔なり。未だ禪を得ざる時一有り。謂わく希望心なり。禪に入るとき四有り。謂わく疑・怖・喜・愛なり。禪を出づるとき多く憂悔有り。此れは則ち能く定心を破して退失せしむ。若し通じて此の六を論ぜば、皆未だ入・住・出せざる中に在りて、俱に此の六法有りて、能く定を退失することを得。若し能く此の六法

退失定。若能離此六法。即易得定。以不失故名得也。此雖近事。若不說者。則人不知。若善取其意。則知遮障。

二明証未到地定相。因此欲界定後。身心泯然虛豁。失於欲界之身。坐中不見頭手床敷。猶若虛空。此是未到地定。所言未到地者。此地能生初禪故。即是初禪方便定。亦名未來禪。亦名忽然湛心。証此定時。不無淺深之相。今不具明。

復次此等定中。或有邪偽。行者心証。其相非一。略出二事。一定心過明。二者過暗。並是邪定。明者入定時。見外境界青黃赤白。或見日月星辰宮殿等事。或一時日乃至七日。不出禪定。見一切事。如得神通。此為邪當急去之。二者若入此定。暗忽無所覺知。如眠熟不異。即是無心想

を離れば、即ち定を得易し。失せざるを以ての故に得と名づくるなり。此れは近事と雖も、若し説かずんば、則ち人知らず。若し善く其の意を取らば、則ち遮障を知る。

II 未到地定の相を証することを明かす

二に未到地定の相を証することを明かす。此の欲界定の後、身心は泯然として虚豁なるに因りて、欲界の身を失し、坐の中に頭手床敷を見ざることに、猶お虚空の若し。此れは是れ未到地定なり。言う所の未到地とは、此の地は能く初禪を生ずるが故に、即ち是れ初禪の方便定なり。亦た未來禪と名づけ、亦た忽然湛心と名づく。此の定を証する時、淺深の相無からざるも、今は具さに明かさず。

復た次に、此れ等の定の中、或いは邪偽有り。行者、心証すべし、其の相は一に非ず。略して二事を出す。一に定心の過明、二には過暗なり。並びに是れ邪定なり。明とは定に入る時、外の境界の青・黄・赤・白なるを見、或いは日・月・星・辰・宮殿等の事を見、或いは一時日、乃至七日、禪定を出でず、一切の事を見て、神通を得るが如し。此れを邪と為せば急に急に之を去るべし。二には若し此の定に入りて、暗忽として覺知する所無く、眠の熟するに異ならざるが如くんば、即ち是れ無心想事成なり。能く行人をして顛倒

法。能令行人生顛倒心。当急却之。此則略說邪定之相。是中妨難。非可具以文伝。

復次若依成論毘曇。分別二定。為不便也。今依尊者瞿沙所明。分別二定有異。亦応無失。具如前引摩訶衍中釈。而多見坐人証定之時。実有兩種定相不同。是故今說欲界未到二定各異。

第三明証初禪相。自有六種。一明初禪¹⁰發相。二明支。三明因果体用。四明淺深。五明進退。六明功德。

第一正明初禪發相中。復為四意。一正明初禪發相。二簡非禪之法。三釈發因縁。四分別邪正。

心を生ぜしむ。当に急に之を却くべし。此れは則ち略して邪定の相を説く。是の中の妨難、具さに文を以て伝うべきに非ず。

復た次に、若し『成論』『毘曇』に依らば、二定を分別すること、便ならずと為すなり。⁸今、尊者瞿沙の明かす所に依らば、二定を分別すること異なるも、亦た応に失無かるべし。⁹具さには前に『摩訶衍』を引く中に釈するが如し。¹⁰多く坐人を見るに証定の時、実に兩種有りて定相は同じからず。是の故に今欲界・未到を説くこと、二定各の異あり。

III 初禪の相を証することを明かす

第三に初禪の相を証することを明かす。自ら六種有り。一に初禪の發相を明かす。二に支を明かす。三に因果体用を明かす。四に淺深を明かす。五に進退を明かす。六に功德を明かす。

i 正しく初禪の發相を明かす

第一に正しく初禪の發相を明かす中、復た四意と為す。一に正しく初禪の發相を明かす。二に非禪の法を簡ぶ。三に發の因縁を釈す。四に邪正を分別す。

第一初禪発相者。行者於未到地中。証十
六觸成就。即是初禪発相。云何是証。若
行者於未到地中。入定漸深。身心虚寂。若
不見内外。或経一日乃至七日。或一月乃
至一年。若定心不壞。守護增長。於此定
中。忽覺身心凝然。運運而動。當動之
時。還覺漸漸有身如雲如影動発。或從上
発。或從下発。或從腰発。漸漸遍身。上
発多退。下発多進。

動觸発時。功德無量。略説十種善法眷属
与動俱起。其十者何。一定。二空。三明
浄。四喜悅。五樂。六善心生。七知見明
了。八無累解脫。九境界現前。十心調柔
軟。如是十法。与動俱生。名動眷属。勝
妙功德。莊嚴動法。若具分別。則難可
尽。

『釈禪波羅蜜次第法門』「修証」の註釈的研究(二)(大松)

(1) 初禪の発相

第一に初禪の発相とは、行者、未到地の中において、十六觸の成就すること
を証せば、即ち是れ初禪の発相なり。云何ぞ是れ証なるや。若し行者、未到
地の中において、定に入ること漸く深からば、身心虚寂にして、内外を見
ず。或いは一日乃至七日を経、或いは一月乃至一年にして、若し定心壞せ
ず、守護し增長せば、此の定の中において、忽ち身心凝然にして、運運とし
て動ずることを覺す。當に動ずべきの時、還た漸漸に身の雲の如く影の如く
動発すること有るを覺す。或いは上より発し、或いは下より発し、或いは腰
より発し、漸漸に身に遍ず。上より発せば多く退し、下より発せば多く進
む。

動觸の発する時、功德無量なり。略説せば、十種善法の眷属、動と俱に起こ
る。其の十とは何ん。一に定、二に空、三に明浄、四に喜悅、五に樂、六に
善心生、七に知見明了、八に無累解脫、九に境界現前、十に心調柔軟なり。
是の如き十法、動と俱に生ずるを、動の眷属と名づく。勝妙なる功德ありて
動法を莊嚴す。若し具さに分別せば、則ち尽くべきこと難し。

此則略説。初動触相。如是或經一日。或經十日。或一月四月。如是一年。此事既過。復有余触。次第而發。故名初禪。余触發者。謂八触也。一動。二痒。三涼。四暖。五輕。六重。七澁。八滑。復有八触。謂一掉。二猗。三冷。四熱。五浮。六沈。七堅。八軟。此八触与前相雖同。而細分別不無小異。更別出名目。足前合為十六触。此十六種觸發時。悉有善法功德眷屬。如前動触中説。行者因未到地。發如是等種種諸触功德善法。故名初禪初發。並是色界清淨四大。依欲界身中而發。故摩訶衍云。色界四大造色。著欲界身中。

問曰。二十七触。何故有去取。復出異触名。

料簡云云。

此れは則ち略して初の動触の相を説く。是の如く、或いは一日を經、或いは十日を經、或いは一月、四月、是の如く一年にして、此の事既に過ぎば、復た余の触有り。次第して發するが故に初禪と名づく。余の触の發すとは、謂わく八触なり。一に動、二に痒、三に涼、四に暖、五に輕、六に重、七に澁、八に滑なり。復た八触有り。謂わく、一に掉、二に猗、三に冷、四に熱、五に浮、六に沈、七に堅、八に軟なり。此の八触は前の相と同じと雖も、細に分別せば小異無からず。更に別して名目を出だす。前に足して合して十六触と為す。此の十六種の觸發する時、悉く善法・功德の眷屬有り。前の動触の中に説くが如し。行者、未到地に因りて、是の如き等の種種の諸の觸の功德・善法を發す。故に初禪の初發と名づく。並びに是れ色界の清淨なる四大なり。欲界の身の中に依りて發す。故に『摩訶衍』に云わく、「色界の四大造色、欲界の身の中に著す」と。

問うて曰わく、二十七触、何が故ぞ去取有るや。復た異の触の名を出だすや。

料簡するに云云。

第二料簡非禪之相者。問曰。行者於初坐中。未得定心。亦発如冷・暖・動等触。既無如上所説功德之事。有人言。此是病法起。所以者何。如重・洩等是地大病生。如輕・動触是風大病生。如熱・痒等触是火大病生。如冷・滑等触是水大病生。復次因・暖・熱・痒等生・貪・欲・蓋。因・重・滑・沈等触・生・睡眠・蓋。又因・重・堅・洩等生・瞋・蓋。当知触等発時。能令四大発病。及生五蓋障法。或言是魔所作。若発動時如上過。上所説皆魔触発。云何以此為初禪耶。

答曰。不然。若如汝向所説触発之相。此是生・病・生・蓋・之・触。若如上説及増者。亦是魔触発相。今説不爾。若未得未到地定。而先発触者。多是病触。是生・蓋・及・魔所作。若触発時。無如上所説十種功德眷屬

(2) 非禪の相を料簡す

第二に非禪の相を料簡すとは、問うて曰わく、行者、初め坐の中において、未だ定心を得ざるも、亦た是の如き冷・暖の動等の触を発す。既に上に説く所の功德の事無し。有る人言わく、「此れは是れ病法の起るなり」と。所以は何ん。重・洩等、是れ地大病の生ずるが如し。輕の動触、是れ風大病の生ずるが如し。熱・痒等の触、是れ火大病の生ずるが如し。冷・滑等の触、是れ水大病の生ずるが如し。復た次に、暖・熱・痒等に因りて貪欲蓋を生じ、重・滑・沈等の触に因りて睡眠蓋を生じ、動・浮・冷等に因りて掉悔蓋を生じ、強・洩等に因りて疑蓋を生じ、又、重・堅・洩等に因りて瞋蓋を生ず。当に知るべし、触等の発する時、能く四大をして発病し、及び五蓋の障法を生ぜしむ。或いは言わく、「是れ魔の作す所なり」と。若し動を發する時、上の如き過あらば、上に説く所は皆魔の触の発なり。云何が此れを以て初禪と為さんや。

答えて曰わく、然らず。若し汝の向に説く所の触発の相の如くんば、此れは是れ病を生じ蓋を生ずるの触なり。若し上に説き及び増するが如くんば、亦是れ魔の触の発する相なり。今説くは爾らず。若し未だ未到地定を得ずして先に触を發せば、多く是れ病の触にして、是れ蓋を生じ、及び魔の作す所なり。若し触の發する時、上に説く所の如き十種の功德の眷屬無からば、亦

者。亦是病触。生蓋及魔触也。今所說觸發者。要因未到地定發。亦具足有諸功德眷屬俱發故以此為初禪發相。何可疑哉。

問曰。未到地前發觸。但是生病生蓋及魔触。亦有治病除蓋非魔触不。

答曰。亦有此義。

問曰。若爾与初禪触復云何異。

答曰。有異。欲界雖有治病除蓋及非魔触。而非初禪触者。此猶是欲界中四大色法。不能發定。無諸功德支林善法故不名初禪。此則略出欲界善不善触相。但行人初坐。或有証此一兩。或都不証。然既有此法。故略出之耳。

問曰。未到地中。亦發欲界善不善触不。

答曰。非無此義。

た是れ病の触にして、蓋を生じ及び魔の触なり。今説く所の触發とは、要らず未到地定に因りて發す。亦た具足して諸の功德の眷屬有りて俱に發するが故に此れを以て初禪の發相と為す。何ぞ疑うべけんや。

問うて曰わく、未到地の前に触を發せば、但だ是れ病を生じ蓋を生じ及び魔の触なるのみ。亦た病を治し蓋を除き魔の触に非ざること有るや不や。

答えて曰わく、亦た此の義有り。

問うて曰わく、若し爾らば、初禪の触と復た云何が異なるや。

答えて曰わく、異有り。欲界に病を治し蓋を除き及び魔の触に非ざること有りと雖も、初禪の触に非ざれば、此れは猶お是れ欲界の中の四大色法にして、定を發すること能わず。諸の功德・支林の善法無きが故に初禪と名づけず。此れは則ち略して欲界の善・不善の触の相を出だす。但だ行人初めて坐するとき、或いは此の一兩を証すること有り。或いは都て証せず。然るに既に此の法有るが故に略して之を出だすのみ。

問うて曰わく、未到地の中、亦た欲界の善・不善の触を發するや不や。

答えて曰わく、此の義無きに非ず。

三明禪発因縁有二。

一者從初修禪以來。不計勤苦。既有善心。功力成就。自然感報。如法華中說。隨功賞賜。乃至禪定根力等事。復次有師言。是十善相応。此意難見。

二者色界五陰住在欲界身中。麤細相違故。有掉動八触等事。譬如世人憂愁煩惱内起。結滯壅塞不通。令四大受諸熱惱。從心而生。乃至得病至死。不從外来。而有苦也。今此禪中有触染之事。亦從心有由數息故。使心軟細。修諸定法。色界定法住在欲界身中。色定之法与欲界報身相触故。有十六触次第而生。亦不從外来而能覺知。故名爲触。此八雖有十六。並約四大而発。因四大生。地中四者。重沈堅

(3) 禪の発する因縁を明かす

三に禪の発する因縁を明かすに二有り。

一には初め修禪より以來、勤苦を計せず、既に善心有りて、功力成就し、自然に報を感ず。『法華』の中、「隨功賞賜、乃至禪定根力」等の事を説くが如し。復た次に、有る師言わく、「是れ十善と相応す」¹⁶と。此の意、見難し。

二には色界の五陰は欲界の身の中に住在するも、麤細の相違するが故に、掉・動の八触等の事有り。譬えば世人の憂愁し、煩惱内より起り、結滯し壅塞して通ぜず、四大をして諸の熱惱を受けしめ、心より生じ、乃至病を得て死に至るが如し。外より来たらざるも、苦有るなり。今、此の禪の中、触染の事有り。亦た心より数息に由ること有るが故に、心をして軟細ならしめ、諸の定法を修す。色界の定法、欲界の身の中に住在し、色定の法と欲界の報身と相触するが故に、十六触の次第して生ずること有り。亦た外より来たらざるも、能く覺知す。故に名づけて触と爲す。此の八は十六有りと雖も、並びに四大に約して発し、四大に因りて生ず。地の中に四とは、重・沈・堅・渋なり。水の中の四とは、涼・冷・軟・滑なり。火の中の四とは、

洩。水中四者。涼冷軟滑。火中四者。暖熱猗痒。風中四者。動掉輕浮。故金光明云。地水二蛇。其性沈下。風火二蛇。性輕上昇。

問。若因四大但応有四。何得十六。

答曰。相兼故得爾。如熱是火体。兼水故有暖。兼風故有痒。兼地故有猗。兼三之時。失本熱相故説有四。余三大各兼三義。類此可知。復次此十六觸。各有十種功德善法。合則有一百六十法。而初坐発法之人。未必発尽。或発三五。故略出之。

問曰。此八觸為当発有次第。為無次第。

諸触之中先発何等。

答曰。若論其次第。亦無定前後。雖四大因縁合時強者先発。而多見有人從動而発。事如前釈。

暖・熱・猗・痒なり。風の中の四とは、動・掉・輕・浮なり。故に『金光明』に云わく、「地・水の水二蛇、其の性は沈下なり。風・火の二蛇、性は輕く上昇す¹⁷⁾」と。

問う。若し四大に因らば但だ応に四有るべきのみ。何ぞ十六を得るや。

答えて曰わく、相兼ぬるが故に爾ることを得。熱は是れ火体なるも、水を兼ぬるが故に暖有り、風を兼ぬるが故に痒有り、地を兼ぬるが故に猗有るが如し。三を兼ぬるの時、本の熱の相を失するが故に四有ることを説く。余の三大、各の三義を兼ぬ。此れに類して知るべし。復た次に、此の十六觸、各の十種の功德・善法有り。合せば則ち一百六十法有るも、初坐発法の人、未だ必ずしも発し尽くさず。或いは三五を発す。故に略して之を出だす。

問うて曰わく、此の八觸、当に発すべきとき次第有りと為すや、次第無しと為すや。諸の触の中、先に何等を發するや。

答えて曰わく、若し其の次第を論ぜば、亦た定の前後無し。四大の因縁合する時、強者の先に發すと雖も、多く人有りて動より發することを見る。事は前に釈するが如し。¹⁸⁾

四者辨邪正之相。具如前内方便中驗善惡根性相明虛実中説。是中応広分別。

第二明支義。亦開為三。一積支名。二積支義。三辨支相。

第一積支名者。初禪有五支。一覺支。二觀支。三喜支。四樂支。五一心支。覺者初心覺悟名為覺。觀者後細心分別名為觀。慶悅之心名為喜。恬澹之心名為樂。寂然不散名一心。所以制五支者。若對不善。即為破五欲五蓋。若對善法。即對行五法。故釈論云。離五蓋。行五法。具五支。入初禪。

(4) 邪正の相を辨ず

四には邪正の相を辨ず。具さには前の内方便の中、善惡の根性の相を驗し、虚実を明かす中に説くが如し。¹⁹⁾ 是の中、應に広く分別すべし。

ii 支の義を明かす

第二に支の義を明かす。亦た開きて三と為す。一に支の名を積す。二に支の義を積す。三に支の相を辨ず。

(1) 支の名を積す

第一に支の名を積すとは、初禪に五支有り。一に覺支、二に觀支、三に喜支、四に樂支、五に一心支なり。覺とは初心に覺悟するを名づけて覺と為す。觀とは後に細心に分別するを名づけて觀と為す。慶悅の心を名づけて喜と為す。恬澹の心を名づけて樂と為す。寂然として散ぜざるを一心と名づく。五支を制する所以は、若し不善に對せば、即ち五欲・五蓋を破すと為す。若し善法に對せば、即ち五法を行ずるに對す。故に『釈論』に云わく、²⁰⁾「五蓋を離れ、五法を行じ、五支を具して、初禪に入る」と。

第二釈支義者。如纏絡經說。禪名支林。

此即拋總別之明義也。言支者。支離為義。如因樹根莖則有枝条。根莖是一。枝条有異。禪中支義亦爾。從一定心出生五支。此是總中別義。所言林者。如林因衆多樹得有林名。禪義亦爾。五支和合。總受禪稱。此即拋別中之總。故知若說禪即知有五支。如聞林名必知有樹及以枝条。復次有人言。枝持為義。如欲界未到地中。雖有單靜定心。未有覺觀等五支相杖持。則定心淺薄易失。若得初禪。即有覺觀等法。則定心安隱。牢固難壞。

三辨支相。若數人辨相。正約二十二心數去取辨五支相。具出彼義云云。今家所明。略為二。一者別。二者通。

(2) 支の義を釈す

第二に支の義を釈すとは、『纏絡經』に説くが如し。「禪を支林と名づく」と。此れは即ち總別に抛りて之の義を明かすなり。言わく支とは、支離を義と為す。樹の根莖に因りて則ち枝条有るが如し。根莖は是れ一なるも、枝条は異有り。禪の中の支の義も亦た爾り。一の定心より五支を出生す。此れは是れ總の中の別の義なり。言う所の林とは、林は衆多の樹に因りて林の名有ることを得るが如し。禪の義も亦た爾り。五支和合して、總じて禪の稱を受く。此れは即ち別の中の總に抛る。故に知んぬ、若し禪を説かば即ち五支有ることを知り、林の名を聞きて必ず樹及び枝条有ることを知るが如し。復た次に、有る人言わく、「枝持を義と為す。欲界・未到地の中、単に靜定心有りと雖も、未だ覺觀等の五支の共に相杖持すること有らざれば、則ち定心淺薄にして失し易きが如し。若し初禪を得ば、即ち覺觀等の法有り。則ち定心安隱なりて、牢固にして壞し難し」と。

(3) 支の相を辨ず

三に支の相を辨ず。若し數人の相を辨ぜば、正しく二十二の心數に約し、去取して五支の相を辨ず。具さには彼の義に出づ、云云。今家の明かす所、略して二と為す。一には別、二には通なり。

一別積五支相者。云何名覺。覺名觸覺。有二種。一成禪覺。二壞禪覺。如有風能成雨。有風能壞雨。如上所說。十六觸中。一觸有十種善法眷屬。安隱莊嚴者。是成禪覺。如上說。一觸有二十惡法。是壞禪覺。復次覺者覺屬身根。為身有情異乎木石。所以对觸故生覺。如經說見聞覺知義。見屬於眼。聞屬於耳鼻觸。覺屬於身。知屬於意。亦对舌也。有增用故。

問曰。如經中說。六觸因緣生受。何得覺觸但屬於身耶。

答曰。此对通說。若通時見中亦說聞。余義類爾。今就別義論覺支者。正对身也。於未定中發十六觸。觸於身根生。識覺前觸相。故名覺支。復次覺名驚悟。行者得初禪。未曾所得善法諸功德故。心大驚

(I) 別して五支の相を積す

一に別して五支の相を積すとは、云何が覺と名づくるや。覺は觸覺に名づく。二種有り。一に成禪覺、二に壞禪覺なり。風有りて能く雨を成じ、風有りて能く雨を壞するが如し。上に説く所の如き、十六觸の中、一觸に十種の善法の眷屬有りて安隱にして莊嚴すとは、是れ成禪覺なり。上に説くが如き、一觸に二十惡法有りとは、是れ壞禪覺なり。復た次に、覺とは覺は身根に屬す。身は情有るが為に、木石に異なり、所以に觸に対するが故に覺を生ず。『經』に「見聞覺知」の義を説くが如し。²⁴ 見は眼に屬し、聞は耳・鼻・觸に屬し、覺は身に屬し、知は意に屬し、亦た舌に対するなり。増用有るが故なり。

問うて曰わく、『經』の中に「六觸は縁に因りて受を生ず」と説くが如し。²⁵ 何ぞ覺觸は但だ身に屬することを得んや。

答えて曰わく、此れは通に對して説く。若しは通の時、見の中に亦た聞を説く。余の義も類して爾り。今は別義に就きて覺支を論ずれば、正しく身に對するなり。未定の中において、十六觸を發す。觸は身根において生じ、前の觸相を識覺するが故に覺支と名づく。復た次に、覺は驚悟と名づく。行者、初禪を得て、未だ曾て善法の諸の功德を得る所あらざるが故に、心は大

悟。昔常為欲火所燒。得初禪時。如人入清涼池。但此覺生時。与欲界身根生覺有異。何以故。与定等善法一時俱發。是以偈言。如貪得寶藏大喜覺動心。故言初心。麁念名為覺。此与数人明義。応有小異料簡云云。

二積觀支者。後細心分別名為觀。既分別觸發已。正念之心。思量分別。向觸生時。与欲界中善法。及未到等法大有異。所以者何。於此觸中。有種種善法珍寶。与觸俱發。欲界所無。復次分別者。分別十六觸中法宝之相亦不同。知麁則離。知善則修。此細心分別。故名觀支。故經說分別則為觀。

問曰。若爾覺有何等異。

答曰。如論說。麁心在緣名為覺。細心分別名為觀。又問。如毘曇中說。覺觀在一

いに驚悟す。昔は常に欲火の燒する所と為るも、初禪を得る時、人の清涼池に入るが如し。²⁶但だ此の覺の生ずる時、欲界の身根の生ずる覺と異有り。何を以ての故に。定等の善法と一時に俱に發す。是こを以て偈に言わく、「貧の寶藏を得て大喜し動心するを覺するが如し」と。²⁷故に言わく、初心の麁念を名づけて覺と為す。此れは数人の明かす義と、応に小異有るべし、料簡す、云云。

二に觀支を積すとは、後に細心に分別するを名づけて觀と為す。既に觸の發するを分別し已りて、正念の心もて、思量し分別す。向に觸の生ずる時、欲界の中の善法、及び未到等の法と大いに異有り。所以は何ん。此の觸の中において、種種の善法・珍寶有り。觸と俱に發し、欲界に無き所なり。復た次に、分別とは、十六觸の中の法宝の相を分別すること亦た同じからず。麁を知らば則ち離れ、善を知らば則ち修す。此れは細心に分別するが故に觀支と名づく。故に『經』に「分別するは則ち觀と為す」と説く。

問うて曰わく、若し爾らば覺と何等の異有るや。

答えて曰わく、『論』に説くが如し。「麁心に緣在るを名づけて覺と為し、細心に分別するを名づけて觀と為す。又た問う。『毘曇』の中に説くが如し。

心中。今云何為二。答曰。二法雖在一心。二相不俱。謂覺時觀不明了。觀時覺不明了。譬如撞鐘鐘聲雖一而麁細有異。一心中覺觀亦如是。復次身根身識相應名為覺。意根意識相應名為觀。身識是外鈍故名麁。意識是內利故能分別名細。此雖同緣一觸。而二相不俱。故為觀支。

三明喜支者。見細心分別思量。覺知十六觸等。微妙珍寶。昔所未逢。是以心喜慶悅。又知所失。欲樂甚少。今得初禪功德。其樂甚多。如是覺觀。利我不少。深心慶悅。踊躍無量。故名喜支。

四樂支者。行者於歡喜已後。其心恬然。受於觸中之樂。樂法娛心。安隱恬愉。故名樂支。

「覺觀は一心の中に在り²⁹⁾」と。今、云何が二と為すや。答えて曰わく、二法は一心に在りと雖も、二相は俱ならず。謂わく、覺の時に觀は明了ならず、觀の時に覺は明了ならず。譬えば撞鐘と鐘聲と一なりと雖も、麁細に異有るが如し³⁰⁾と。一心の中の覺觀も亦た是の如し。復た次に、身根と身識と相應するを名づけて覺と為す。意根と意識と相應するを名づけて觀と為す。身識は是れ外鈍なるが故に麁と名づけ、意識は是れ內利なるが故に能く分別すれば細と名づく。此れは同じく一觸より縁ずと雖も、二相は俱ならず。故に觀支と為す。

三に喜支を明かすとは、細心に分別し思量して、十六觸等を覺知し、微妙の珍寶、昔未だ逢わざる所を見る。是を以て心に喜び慶悦す。又た失する所を知れば、欲樂甚だ少し。今、初禪の功德を得れば、其の樂甚だ多し。是の如き覺觀、我を利すること少なからざれば、深心に慶悦し、踊躍すること無量なり。故に喜支と名づく。

四に樂支とは、行者、歡喜の已後において、其の心は恬然として、觸中の樂を受く。樂法は心を娛しませ、安隱にして恬愉なり。故に樂支と名づく。

問曰。喜樂有何異。

答曰。如上覺觀分別。今喜樂亦爾。麁樂名喜。細樂名樂。亦可言麁喜為喜。細喜為樂。復次喜樂。雖俱是歡悅之相。而二相有異。喜根相應故名喜。樂根相應故名樂。踊躍心中故名喜。恬靜心中故名樂。復次行者初緣得樂。心生歡喜。未及受樂名喜。後緣喜情既息。以樂自娛故名樂。譬如饑人得食。初得歡喜。未及受其味故名喜。後得食之。方受味中之樂故名樂。又如三禪有樂而無喜。故知二根有異。

五一心支者。經久受樂心息雖有覺觸等事。而心不緣。既無分散。定住寂靜故名一心支。

此則略說初禪五支次第而發。並拋成就。立於支義。

問うて曰わく、喜と樂と何れの異有るや。

答えて曰わく、上の覺觀を分別するが如く、今の喜・樂も亦た爾り。麁樂を喜と名づけ、細樂を樂と名づく。亦た麁喜を喜と為し、細喜を樂と為すと云うべし。復た次に、喜・樂は俱に是れ歡悅の相なりと雖も、二相に異有り。喜根に相應するが故に喜と名づけ、樂根に相應するが故に樂と名づく。踊躍の心の中なるが故に喜と名づけ、恬靜の心の中なるが故に樂と名づく。復た次に、行者、初緣に樂を得て、心に歡喜を生じ、未だ樂を受けるに及ばざるを喜と名づけ、後緣に喜の情既に息み、樂を以て自ら娛しむが故に樂と名づく。譬えば饑人の食を得るが如し。初めて得るとき歡喜し、未だ其の味を受けるに及ばざるが故に喜と名づけ、後に之の食を得て、方に味中の樂を受くるが故に樂と名づく。又た三禪に樂有りて喜無きが如し。故に知んぬ、二根に異有り。

五一心支とは、久しく樂を受くることを經て心は息み、覺觸等の事有りとし雖も、心に緣ぜず。既に分散無く、定住し寂靜なるが故に、一心支と名づく。

此れは則ち略して初禪の五支の次第して發するを説く。並びに成就するに拋りて、支義を立つ。

問曰。若爾約十六觸。一觸皆有五義不。答曰。実爾。故知初禪對緣。即有衆多支也。雖復對觸有多。終不出五支。譬如五陰。若對五根。根根說五。雖復衆多。而不可說言有第六陰。五支亦爾。

二者約通義明五支即一覺發時。具有五支義。云何當覺發時。本對於觸。覺觸中冷暖。即是覺支。當覺時豈不即分別。知冷異暖。即是觀支。當觸發時。即有喜心。如人見好美色。即生喜悅。不待思量。故論偈說。大喜覺動心。觸發之時。必拳体怡解。即是樂支。解發必与定俱。故名覺觀俱三昧。當知即有一心支。此則五支一時而發。不待成就。但於事未顯故。拋成而說。別義如前。

問うて曰わく、若し爾らば十六觸に約するとき、一觸に皆五義有るや不や。答えて曰わく、実に爾り。故に知んぬ、初禪は縁に對せば、即ち衆多の支有るなり。復た觸に對するに多有りと雖も、終に五支を出でず。譬えば五陰の如し。若し五根に對せば、根根に五を説く。復た衆多なりと雖も、説きて第六陰有りと云うべからず。五支も亦た爾り。

(II) 通の義に約して五支を明かす

二には通の義に約して五支を明かさば、即ち一覺の發する時、具さに五支の義有り。云何が當に覺の發すべき時、本と觸に對せんや。觸の中の冷暖を覺すれば、即ち是れ覺支なり。當に覺すべき時、豈に即ち分別せざらんや。冷は暖に異なるを知れば、即ち是れ觀支なり。當に觸の發すべき時、即ち喜心有り。人の好美の色を見て、即ち喜悅を生ずること、思量を待たざるが如し。故に『論』の偈に、「大喜し動心するを覺す」と説く。觸發の時、必ず体を挙げて解することを怡べば、即ち是れ樂支なり。解の發すること必ず定と俱なり。故に覺觀俱三昧と名づく。當に知るべし、即ち一心支有り。此れは則ち五支の一時にして發し、成就を待たず。但だ事において未だ顯せざるのみなるが故に、成に抛りて説く。別の義は前の如し。

問曰。若爾心便並慮。

答曰。心雖不俱法並何過。此類如十大地

心王心數之義。

問曰。若通支有五者。五支応有二十五。

答曰。如仏經中說五陰。一陰有五。五五二十有五。而不乖五陰之義。通五支義亦如是。

第三明体用。即為二意。一者明因果。二明体用。

一因果者。遠而論之。行内外方便。及入未到地等為因。感得初禪為果。今就近積。但拋初禪。自有因果。有人言。四支為因。後一心支為果。此即無文。今依纒絡解禪支。五支為因。第六默然心為定体。即以体為果。若通論因果。支支相

問うて曰わく、若し爾らば心は便ち慮と並ぶるや。

答えて曰わく、心は俱ならずと雖も、法として並ぶるに何れの過あらんや。

此れは類せば十大地の心王と心数の義の如し。³²⁾

問うて曰わく、若し通じて支に五有らば、五支は応に二十五有るべきや。

答えて曰わく、仏の『經』の中に五陰を説くが如し。一陰に五有り。五五にして二十有五なるも、五陰の義に乖かず。通の五支の義も亦た是の如し。

iii 体用を明かす

第三に体用を明かさば、即ち二意と為す。一には因果を明かす。二に体用を明かす。

(I) 因果

一に因果とは、遠にして之を論ぜば、内外の方便を行じ、及び未到地等に入るを因と為し、初禪を感得するを果と為す。今、近に就きて積せば、但だ初禪に拋るのみにして、自ら因果有り。有人言わく、「四支を因と為し、後の一心支を果と為す³³⁾」と。此れは即ち文に無し。今、『纒絡』の禪支を解するに依らば、五支を因と為し、第六默然心を定体と為す³⁴⁾。即ち体を以て果と為す。若し通じて因果を論ぜば、支支は相因にして、悉く因果を辨ずること

因。悉得辨因果也。

二明体用。還以默然心為定体。從默然觸更動發起五支。此則為用。何以故。從体起用。用則在後。因則拋前。

問曰。因用体果。即無分別。

答曰。不然。雖同拋五支明因用。就默然為体果。然義意有異。所以者何。因中五支。為感默然之果。因默然之果。起五支之法。此就默然為体。五支為用。例如三十七品。道前為因。道後為用。

問曰。有時從默然体。發勝品五支。後得增勝默然。此義云何。答曰。若爾即還応説因果。若無勝品但是体用。

を得るなり。

(2) 体用を明かす

二に体用を明かす。還りて默然心を以て定体と為す。默然より触は更に動じて五支を發起す。此れを則ち用と為す。何を以ての故に。体より用を起こせば、用は則ち後に在り、因は則ち前に拋る。

問うて曰わく、因用にして体果なれば、即ち分別無きや。

答えて曰わく、然らず。同じく五支に拋りて因用を明かし、默然に就きて体果と為すと雖も、然るに義の意に異有り。所以は何ん。因の中の五支に默然の果を感じ、默然の果に因りて五支の法を起こすと為す。此れは默然を体と為し、五支を用と為すに就く。例せば、三十七品の道前を因と為し、道後を用と為すが如し。

問うて曰わく、有る時、默然の体より勝品の五支を發し、後に默然を増勝することを得。此の義は云何。

答えて曰わく、若し爾らば即ち還りて応に因果を説くべし。若し勝品無くんば、但だ是れ体用なるのみ。

第四明淺深者。初禪発時。五支及默然心。前後不無麁細之異。故有淺深。応須分別。所以者何。如論云。仏弟子修諸禪時。有下中上。名為三品。離此三品。一品為三。故有九品淺深之相。若細而論。則応有無量品。外道得定。亦有淺深。而不作品説者。以其心麁於定中不覚故。亦以不修無漏觀慧照了。則心不覚知。就立品明淺深中。自為二意。一約同類。二約異類。一同類者。如一動触発時漸漸覺深。乃至九品。二約異類者。如動触謝後。即発余触。雖触相不同。而覚定漸深勝於上。復次若約五支中明淺深者。亦有二。一同類者。如触発五支時。即有淺深之相。二異類者。若五支次第增長。一支中。亦各自有淺深之相。

iv 淺深を明かす

第四に淺深を明かすとは、初禪の發する時、五支及び默然心、前後に麁細の異無からざるが故に淺深有り。應に須らく分別すべし。所以は何ん。『論』に「仏弟子、諸禪を修する時、下・中・上有り。名づけて三品と為す。此の三品を離して、一品を三と為す。故に九品の淺深の相有り」と云うが如し。若し細にして論ぜば、則ち應に無量の品有り。外道の定を得ること、亦た淺深有るも、品を説くことを作さざれば、其の心は定の中において麁なるを覺せざるを以ての故に、亦た無漏の觀慧を照了することを修せざるを以て、則ち心に覚知せず。品を立つるに就きて淺深を明かす中、自ら二意と為す。一同類に約す。二に異類に約す。一に同類とは、一の動触の發する時、漸漸に深を覺し、乃至九品あるが如し。二に異類に約すとは、動触の謝する後、即ち余触を發するが如し。触の相同じからずと雖も、定は漸く深く上に勝るを覺す。復次に、若し五支の中に約して淺深を明かさば、亦た二有り。一同類とは、觸の五支を發する時、即ち淺深の相有るが如し。二に異類とは、若し五支の次第に增長せば、一一の支の中、亦た各の自ら淺深の相有り。

問曰。為当要発十六触等具足方名初禪。
為当亦発一一触亦名初禪。

答曰。初禪有二種。一具足。二不具足。
若具發十六觸。此即是具足初禪為勝。若
發一兩觸等。亦得名初禪。何以故。以一
觸具有十種定法眷屬。五支成就故。但此
初禪不名具足。

第五明進退者。証初禪時。有四種人根性
不同。一者退分。二者住分。三者進分。
四者達分。一退分者。若人得初禪時。或
有因縁。或無因縁。而便退失。失有二
種。一者更修還得。二者更修不得。所謂
過去今世障法起故。末世之中。此退分
多。二住分者。有人得初禪已。即不退
失。定心安隱。住分亦有二種。一者任運
自住。二者守護乃住。三進分者。有人得
初禪時。即便進得勝品。乃至進得上地。

問うて曰わく、当に要らず十六触等を具足して發すべきを方に名づけて初禪
と為すや。当に亦た一一の觸を發すべきを亦た名づけて初禪と為すや。

答えて曰わく、初禪に二種有り。一には具足、二には不具足なり。若し具さ
に十六觸を發せば、此れは即ち是れ具足の初禪にして勝と為す。若し一兩の
觸等を發せば、亦た初禪と名づくることを得。何を以ての故に。一觸を以て
具さに十種の定法の眷屬有りて、五支成就するが故なり。但だ此の初禪は具
足と名づけず。

V 進退を明かす

第五に進退を明かさば、初禪を証する時、四種の人の根性の同じからざるこ
と有り。一には退分、二には住分、三には進分、四には達分なり。一に退分
とは、若し人初禪を得る時、或いは因縁有りて、或いは因縁無くして、便ち
退失す。失に二種有り。一には更に修して還りて得。二には更に修して得
ず。所謂、過去・今世の障法起るが故なり。末世の中、此れは退分多し。
二に住分とは、有る人初禪を得已りて、即ち退失せず、定心安隱なり。住分
に亦た二種有り。一には任運に自ら住す。二には守護して乃ち住す。三に進
分とは、有る人初禪を得る時、即便ち進みて勝品を得、乃至進みて上地を
得。進に二種有り。一には功力を加えず、任運に自ら進む。二には勤修して
乃ち進む。四に達分とは、有る人初禪を得る時、此の定の中において、即ち

進有二種。一者不加功力。任運自進。二者勤修乃進。四達分者。有人得初禪時。於此定中。即發見思無漏。達到涅槃。達亦有二種。一者任運自達。二者修觀乃達。

復次此四分定中。復有四種人根性不同。如退分中四者。一自有退退。得九品漸退乃至併失。二自有退住。得九品退至八品七品。便住不失。三自有退進。得九品退至八品七品。乃至一品。從一品還進。四者自有退達。得九品已退還八七等品。乃至一品。於其中間。忽然發真無漏。余住分進分達分。各有四義亦如是。是中或有因放逸障故退。或因懺悔清淨故住進達。此義衆多不可具辨。

第六明初禪功德者。如前偈說。已得離婬

見思の無漏を發して、涅槃に達到す。達に亦た二種有り。一には任運に自ら達す。二には觀を修して乃ち達す。

復た次に、此の四分の定の中、復た四種の人の根性の同じからざること有り。退分の中の四の如きは、一に自ら退の退有り。九品を得て漸く退し、乃至併せて失す。二に自ら退の住有り。九品を得て退すること八品・七品に至り、便ち住して失せず。三に自ら退の進有り。九品を得て退すること八品・七品、乃至一品に至るも、一品より還りて進む。四には自ら退の達有り。九品を得已りて退すること八・七等の品、乃至一品に還り、其の中間において、忽然として真の無漏を發す。余の住分・進分・達分も、各の四の義有ること亦た是の如し。是の中、或いは放逸に因ること有りて障するが故に退し、或いは懺悔に因りて清淨なるが故に住・進・達なり。此の義は衆多にして具さに辨ずべからず。

vi 初禪の功德を明かす

第六に初禪の功德を明かさば、前の偈に説くが如し。「已に婬火を離るるこ

火。則獲清涼定。此偈自可為二功德。一者離過德。二者善心德。此对止行二善。亦可類於智斷二德。故大集經云。初禪者。亦名為離。亦名為具。所言離者。謂離五蓋。所言具者。謂具五支。今釈所以。得初禪時。離貪欲蓋者。欲界之樂麁淺。今得初禪之樂細妙。以勝輕故能離五欲。離瞋者。欲界苦緣逼迫故生瞋。得初禪時。無有諸逼迫。樂境在心故無瞋。能離睡眠者。得初禪時。身心明淨。定法所持。心不昏亂。觸樂自娛。故不睡也。所以能離掉悔者。禪定持心。任運不動。故能離掉。由掉故有悔。無掉即無悔。離疑者。未得初禪時。疑有定無定。今親証定。疑心即除。故得離疑。是故得初禪時。具有離過之德。得初禪時。具足善心功德者。約五支明功德善法。義如前說。復次若得初禪。即具信戒捨定聞慧等善心也。

とを得て、則ち清涼定を獲る」と。此の偈は自ら二の功德と為すべし。一には離過の徳、二には善心の徳なり。此れは止行二善に對す。亦た智斷の二徳に類すべし。故に『大集經』に云わく、「初禪とは亦た名づけて離と為し、亦た名づけて具と為す。言う所の離とは、謂わく五蓋を離るるなり。言う所の具とは、謂わく五支を具するなり」と。今、所以を釈す。初禪を得る時、貪欲蓋と離るとは、欲界の樂は麁淺なるも、今は初禪の樂の細妙なることを得。勝を以て輕を奪うが故に能く五欲を離る。瞋を離るとは、欲界は苦緣にして逼迫なるが故に瞋を生ずるも、初禪を得る時、諸の逼迫有ること無し。樂境の心に在るが故に瞋無し。能く睡眠を離るとは、初禪を得る時、身心明淨にして、定法を所持し、心に昏亂せず、觸の樂を自ら娛しむが故に睡らざるなり。能く掉悔を離るる所以は、禪定もて心を持ち、任運に動ぜず。故に能く掉を離る。掉に由るが故に悔有り。掉無くんば即ち悔無し。疑を離るとは、未だ初禪を得ざる時、有定・無定を疑う。今、親しく定を証すれば、疑の心は即ち除く。故に疑を離るることを得。是の故に初禪を得る時、具さに離過の徳有り。初禪を得る時、善心・功德を具足すとは、五支に約して功德・善法を明かす。義は前に説くが如し。復た次に、若し初禪を得ば、即ち信戒・捨定・聞慧等の善心を具するなり。

『釈禪波羅蜜次第法門』「修証」の註釈的研究(二)(大松)

註

- (1) 灌頂による再治に関しては、佐藤哲英『天台大師の研究』(二〇三—一〇六頁、一一四—一五頁、百華苑、一九六一年三月) 参照。
- (2) 智顛の生涯における時代区分とその著作・講説などについては、佐藤・前掲書(二四—二七頁) 参照。
- (3) 佐藤・前掲書、一〇七—一二七頁。
- (4) 本稿は、拙稿『釈禪波羅蜜次第法門』「止門」の註釈的研究(『曹洞宗研究員研究紀要』第四四号、二〇一四年三月)、『釈禪波羅蜜次第法門』「覺魔事」の註釈的研究(『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第四七号、二〇一四年五月)、『釈禪波羅蜜次第法門』「驗善惡根性」の註釈的研究(『曹洞宗研究員研究紀要』第四五号、二〇一五年三月)、『釈禪波羅蜜次第法門』「安心禪門」及び「治病患」の註釈的研究(『曹洞宗研究員研究紀要』第四六号、二〇一六年三月)、『釈禪波羅蜜次第法門』「修証」の註釈的研究(一)(『禪研究所紀要』第四八号、二〇二〇年三月)と一連の研究である。
- (5) 『次第禪門』巻第五における第七「釈禪波羅蜜修証」章のうち、息の修習に関する講説(『大正藏』四六卷、五〇八頁、下段)を指す。当該部分では、「次第禪門」巻第二における第六「分別禪波羅蜜前方便」章のうち、調息に関する講説(『大正藏』四六卷、四八九頁、下段—四九〇頁、中段)も指示されている。前註(4)、拙稿参照。
- (6) 『摩訶止観』巻第九上に「三明諸禪発相者。若般舟亦発根本而少。常坐等則多。今且約坐論。若身端心攝氣息調和。覺此心路泯然澄靜。怙怙安隱躡躡而入。其心在縁而不馳散者。此名龜住。從此心後怙勝前。名為細住。両心前後中間必有持身法。此法起時自然身体正直。不疲不痛。如似有物扶助身力。若惡持來時緊急勁痛。去時寬緩疲困。此是龜惡持法。若好持法持龜細住無寬急過。或一兩時。或一兩日。或一兩月。稍覺深細。豁爾心地作一分開明。身如雲如影斐然明淨。与定法相応持心不動。懷抱淨除爽爽清冷。随復空淨而猶見身心之相。未有支林功德。是名欲界定」(『大正藏』四六卷、一一八頁、中—下段)とある。
- (7) 『大般涅槃經』巻第二に「譬如醉人。其心眩乱。見諸山川。城廓宮殿。日月星辰。皆悉迴転」(『大正藏』一二卷、六一七頁、上段)とある。
- (8) 未詳。
- (9) 未詳。
- (10) 『大智度論』巻第一七に「是四禪中智定等而樂。未到地中間地智多而定少。無色界定多而智少。是处非樂」(『大正藏』二五卷、一八五頁、中段)とある。
- (11) 刊本及び『大正藏』所収本は「名」と作るが、東大寺本は「明」と作る。文意や他の五種を勘案すると後者が適當で

あろう。

(12) 未詳。

(13) 未詳。

(14) 未詳。

(15) 『妙法蓮華經』卷五に「文殊師利。譬如強力轉輪聖王。

欲以威勢降伏諸國。而諸小王不順其命。時轉輪王。起種種兵而往討罰。王見兵衆戰有功者。即大歡喜隨功賞賜。或与田宅聚落城邑。或与衣服蔽身之具。或与種種珍寶金銀琉璃車渠馬腦珊瑚琥珀象馬車乘奴婢人民。唯髻中明珠不以与之。所以者何。独王頂上有此一珠。若以与之。王諸眷属必大驚怪。文殊師利。如來亦復如是。以禪定智慧力得法国土王於三界。而諸魔王不肯順伏。如來賢聖諸將与之共戰。其有功者心亦歡喜。於四衆中為說諸經令其心悅。賜以禪定解脫無漏根力諸法之財。又復賜与涅槃之城言得滅度。引導其心令皆歡喜。而不為

說是法華經」(『大正藏』九卷、三八頁、下段―三九頁、上段)とある。また、『妙法蓮華經文句』卷第九上に「第五隨功賞賜者。田即三昧宅即智慧。聚落初果二果。邑即三果城即涅槃。衣服即慚忍善法。蔽身之具助道善法也。種種七宝即七覺等。象馬車乘即二乘尽無生智也。奴婢即神通。得有漏善法如人民。唯髻中下。第六而不与珠。有出分段機為小功勳。有出變易之機為大功勳。驚怪者。未有大勳忽賜髻珠。諸臣皆怪。譬衆生大機未動忽說此經二乘疑惑菩薩驚怪」(『大正藏』三四卷、一二三頁、中―下段)とある。

『釈禪波羅蜜次第法門』「修証」の註的研究(二)(大松)

(16) 未詳。

(17) 『金光明經』卷第一に「地水二蛇 其性沈下 風火二蛇 性輕上升」(『大正藏』一六卷、三四〇頁、中段)とある。

(18) 直前で示された初禪の発相に関する講説(『大正藏』四

六卷、五一〇頁、上―中段)を指す。

(19) 『次第禪門』卷第三之下における第六「分別禪波羅蜜前

方便」章のうち、虚実を驗知することを示す講説(『大正

藏』四六卷、四九六頁、下段―四九八頁、下段)を指す。前

註(4)、拙稿参照。

(20) 『大智度論』卷第一七に「呵五欲除五蓋行五法。得至初

禪」(『大正藏』二五卷、一八五頁、中段)とある。

(21) 『菩薩瓔珞本業經』卷上に「禪名支林」(『大正藏』二四

卷、一〇一五頁、上段)とある。

(22) 未詳。

(23) 同様の文は、『止観輔行伝弘決』卷第九之一に「二十三

心数者。婆沙第四云。云何有覺有觀禪。謂通大地十。大善地

十。及心。云何無覺有觀禪。謂通大地十。大善地十。及心。

云何無覺無觀禪。謂亦如是。心者第六識。余識不能次第入

定。故不説之。覺觀并二十為二十二」(『大正藏』四六卷、四

一五頁、上段)とある。

(24) 未詳。

(25) 『大品般若經』卷第七に「六觸因縁生受亦如是」(『大正

藏』八卷、二六八頁、下段)とあり、卷第八に「六觸因縁生

『釈禪波羅蜜次第法門』「修証」の註釈的研究(二)(大松)

- 諸受亦如是」(『大正藏』八卷、二七七頁、上段)とある。
- (26) 『大智度論』卷第一七に「得初禪中。未曾所得善法功德故。心大驚悟。常為欲火所燒。得初禪時。如入清涼池」(『大正藏』二五卷、一八六頁、上段)とある。
- (27) 『大智度論』卷第一七に「如貧得寶藏。大喜覺動心」(『大正藏』二五卷、一八五頁、下段)とある。
- (28) 『大智度論』卷第一七に「分別則為觀。入初禪亦然」(『大正藏』二五卷、一八五頁、下段)とある。
- (29) 『阿毘曇毘婆沙論』卷第二三に「此經所說。明覺觀在一心中」(『大正藏』二八卷、一六九頁、中段)とある。
- (30) 『大智度論』卷第一七に「麤心初念是名為覺。細心分別是名為觀。譬如撞鐘初声大時名為覺。後声微細名為觀。問曰。如阿毘曇說。欲界乃至初禪。一心中覺觀相応。今云何言麤心初念名為覺細心分別名為觀。答曰。二法雖在一心二相不俱。覺時觀不明了。觀時覺不明了」(『大正藏』二五卷、一八六頁、上段)とある。
- (31) 前註(27)参照。
- (32) 前註(23)参照。
- (33) 『菩薩瓔珞本業經』卷上に「仏子。三入如幻三昧。所謂十二門禪。初覺觀喜樂一心五支為因。第六默然心為定體。喜樂倚一心四支為因。第五默然心為定體。樂護念智一心五支為因。第六默然心為定體。不苦不樂護念一心四支為因。因名方便。第五默然心為定體。禪名支林。定名撿攝。經劫不散故名
- 為定。四空定同有五支。体用相似故方便道同。支者想護正觀一心五支為因。第六默然心為定體。從定生四無量心。名四無量定。聖人現同凡夫法故。以自在力。復過是法入無量定。百千仏土教化一切衆生故」(『大正藏』二四卷、一〇一五頁、上段)とあるが、いずれも本文の内容と一致しない。文意の通り、当時の一禪觀修習者が明確な典拠なく述べたものが記録されたと見るべきであろう。
- (34) 『菩薩瓔珞本業經』卷上に「初覺觀喜樂一心五支為因。第六默然心為定體」(『大正藏』二四卷、一〇一五頁、上段)とある。
- (35) 『大正藏』所収本は「何」と作るが、刊本及び東大寺本は「所」と作る。後者が適當であろう。
- (36) 『大智度論』卷第一七に「若仏弟子欲離欲界欲界煩惱。思惟斷九種上中下。上上・上中・上下・中上・中中・中下・下上・下中・下下」(『大正藏』二五卷、一八七頁、上段)とある取意か。
- (37) 東大寺本は「退進達」と作る。
- (38) 『大智度論』卷第一七に「已得離婬火。則獲清涼定」(『大正藏』二五卷、一八五頁、下段)とある。
- (39) 東大寺本は「心」と作る。
- (40) 『大方等大集經』卷第二二に「所言禪者何故名禪。疾故名禪。疾大疾。住大住。靜寂靜。觀滅遠離是名為禪。初禪者亦名具足。亦名遠離。云何具足。云何遠離。言遠離者遠離五

蓋。言具足者具足五支」（『大正藏』一三卷、一六一頁、上段）とある。

『釈禪波羅蜜次第法門』「修証」の註釈的研究（二）（大松）